「明治日本の産業革命遺産」世界文化遺産登録決定!

７月５日、ドイツのボンで開催されたユネスコ世界遺産委員会で、日本政府が推薦した「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産登録が決定されました。

鹿児島の構成資産である反射炉跡、旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館などからなる「旧集成館」と「関吉の疎水溝（取水口）」、「寺山炭窯跡」をはじめ、全国８県11市に分布する構成資産は、これらが一体となって、西洋の科学技術と伝統的な日本の文化や技術を融合させ、極めて短期間で産業化を成し遂げたことが世界史的にも類いまれであるとして世界文化遺産に登録されました。

登録決定の瞬間：仙厳園（鹿児島市）

尚古集成館前で登録を祝う関係者

世界遺産登録までの歩み

2005年	7月	鹿児島県主催で九州近代化産業遺産シンポジウムを開催し、「かごしま宣言」をとりまとめる。
2008年	10月	「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会を設置
2013年	9月	政府において政府推薦案件に決定
2014年	1月	推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
	9月	国際記念物遺跡会議（イコモス）が現地調査
2015年	5月	イコモスによる「記載」勧告
	7月	ユネスコ世界遺産委員会で世界文化遺産登録決定

次世代への継承と地域の発展

「明治日本の産業革命遺産」について、ユネスコの世界遺産委員会において、世界遺産としての登録の決定をいただきました。

2005年に、私がイギリスの産業遺産の専門家、故スチュアート・スミス氏などの提言を受けて、鹿児島県でシンポジウムを開催して以来、約10年もの長きにわたり、九州・山口地域をはじめとする関係の自治体が一体となって取り組んできた地方主導のプロジェクトが、このような形で実を結んだことは、大変喜ばしく、関係自治体の皆さまとともに喜びを分かち合いたいと思います。

また、これまで、多大なるご指導をいただいた関係省庁や国内外の専門家の方々をはじめ、種々のご協力を賜った資産所有企業などの関係の皆さますべてに、心から感謝申し上げます。

本遺産の登録は、産業国家日本の礎を築いた先人たちの偉業が改めて評価されたものであり、地域の誇りになるものと考えております。

今後、世界の人々にとっても価値のあるこの遺産群を、関係地域が結束して次の世代に継承するとともに、各地域の発展に活かしてまいります。

「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会
会長（鹿児島県知事）　伊藤　祐一郎

集成館事業とは～近代化は薩摩から始まった～

日本の南端に位置した薩摩藩は、外国の脅威に真っ先に接する場所でした。1840年代、通商を求める欧米列強の外圧にさらされ、近代化に着手しました。さらに1851年に藩主となった島津斉彬による「集成館事業」により、反射炉の建設や紡績など、後に日本が急速な産業の近代化を遂げるための礎が築かれていきました。

【関吉の疎水溝】
鹿児島市下田町1263先

集成館事業の高炉や砲身に穴を開ける装置（さん開台）の動力には、水車動力が用いられていました。磯の背後の山、吉野の大地の上から水を引き、崖の落差を利用することで、その力を高めていました。

【寺山炭窯跡】
鹿児島市吉野町10710-68

集成館事業の反射炉・高炉・蒸気機関などには大量の燃料が必要でした。木炭よりも火力の強い白炭を製造するため、炭を製造するのに適した木々が豊富である寺山に炭焼窯を建設しました。

【旧集成館（旧鹿児島紡績所技師館）】
鹿児島市吉野町9685-15

鹿児島紡績所において技術指導に当たったイギリス人技師の住居として建設された建物です。洋風の外観と内装が特徴ですが、日本の建築技術が随所に使われています。

【旧集成館（旧集成館機械工場）】
鹿児島市吉野町9698-1

鹿児島で石橋･石垣などに広く利用されていた溶結凝灰岩を利用した「ストーンホーム」と呼ばれる洋風建築ですが、一部には日本建築の様式も見られます。

【旧集成館（反射炉跡）】
鹿児島市吉野町9700-1

オランダの技術書の翻訳書を参考に、西欧の鋳造技術を導入し、鉄を溶かして大砲を作るための反射炉が建設されました。
石積工事には城壁や石橋の建設技術が、耐火レンガの製造には薩摩焼の技術が転用されました。

集成館とそれを支えた動力・燃料〔イメージ図〕

問い合わせ先　県庁世界文化遺産課　☎099(286)2364